

追悼



山口彦之先生を偲んで

中西 友子

Tomoko M. Nakanishi

東京大学名誉教授で、庄内バイオ研修センター所長、日本生物環境工学会発会会長等を務められた山口彦之先生が、本年7月8日にご逝去されました。この凶報を受け、大変驚いたと共に、放射線の生物影響研究についての大御所の先生を失ってしまったという悲しみに耐えません。

山口先生は日本における放射線の生物、特に植物に与える影響を調べたパイオニアの研究者で、この分野で他に比較できる研究者はおられません。先生は山形県酒田市のご出身で、1953年東京大学農学部農学科を卒業された後、助教授を経て1970年に東大農学部の教授とされました。平成元年に定年退官されるまで、一貫して、生物への放射線影響に関する研究を推進、更には開拓をされて来られました。

放射線を照射すると植物細胞の中の何が変わるのかについて、先生は、まず細胞周期がどのように変化するかを詳細に調べられました。現在では、細胞周期の分析については、フローサイトメータと呼ばれる、レーザー光を利用した各細胞の分析・分取装置があるので、比較的簡単に実験が進められると思われがちですが、当時は細胞周期を求めると

は、 ^3H -チミジンを使った実験しかありませんでした。それも、細胞に ^3H -チミジンを与え、細胞のマイクロラジオグラフィ像を取得し、その像を顕微鏡下で見ながら ^3H の黒いスポットの数を数えあげて、核へのチミジンの取り込み量を求めて細胞周期を分析するという、今ではもう殆ど誰も行うことができない手間のかかる技術手法で調べあげたものでした。

一方、先生は、X線、 γ 線やイオンビーム等各種放射線による植物の突然変異誘発やDNA修復の研究を精力的に研究されてきました。扱った植物はイネ・オオムギ等の穀物からナタネ、アサガオ、バナナ等非常に幅広く、また、研究内容も、収穫量の増産から物質生産、細胞培養等のマクロの研究から、ミトコンドリアDNA解析等のミクロのバイオテクノロジーの先端研究と、多岐に渡る研究を行われてきました。これらの研究成果やその応用分野等につきましては、1970年代という早い時期から多くの著書として出版されてきました。

そして海外の農業の現状や課題についての見識も深く、IAEA協力研究にも参加され、突然変異育種法の確立にも努められました。17~18年ほど前でしょうか、私がIAEAの農業部門を訪問したことをお話しした際、ウィーン郊外サイバズドルフの素晴らしい農場についての話をしていただいたことを覚えています。文字どおり、放射線が与える生物への影響についての第一人者でした。

また、旧東京大学原子力研究総合センター長も務められ、生物だけでなく、工学系についても造詣の深い先生でした。そして、異常気象、食糧安全保障、エネルギー・セキュリティ、貧困の社会学等、国内に留まらず、海外の農業に向けても熱い視線を注がれていました。1989年の退官の後には、駒澤短期大学教授、庄内バイオ研修センター所長を歴任されました。本当に惜しい先生を失ったという悲しみでいっぱいです。先生のご冥福をお祈りいたします。

(東京大学名誉教授・特任教授/星薬科大学学長)

*写真提供：朝日新聞社

